

大学図書館における貸出履歴分析

武富 一起

図書館は様々なサービスを提供している。その様々なサービスのなかでも利用者が最も簡単に想像できる図書館業務として貸出サービスが当てはまる。貸出とは、「資料提供の基本的方法であり、図書館運営の原点」とされている。図書館利用者の情報環境がここ数十年で大きく変化したとはいえ、この図書館運営の原点となっている貸出サービスを充実させるためには貸出履歴を分析することが有効である。そのため、貸出履歴を用いて図書館蔵書の状況を分析することは、図書館の利用状況を把握するために有効である。

本研究は、学生の専攻と貸出の状況について明らかにするため、学群生の貸出履歴データを学類ごとに学年別貸出回数、図書の主題分野別貸出回数について集計し、専攻分野と貸出の主題分野の関係と特徴を調査する。調査対象とするデータは、筑波大学附属図書館から提供を受けた2011年4月から2018年3月までの貸出履歴データである。

1年間の月別の貸出についてみると、2013年度に学期モジュールの変更が行われて以降、2011年度、2012年度の2年間とは大きく貸出回数が増加した様子が見られるが、先行研究と同様に学生の試験期間に貸出回数が増加し、長期休暇期間に貸出回数が減少している。しかし、試験期間などではなく元々春季休暇であり、モジュールの変更に大きな影響を受けない3月の貸出回数に注目してみると、学期モジュールの変更が行われた2013年度以降の3月の貸出回数は、東日本大震災が発生した2010年度3月の貸出数よりも少ない、もしくは同程度であるということが明らかになった。

また、すべての学類において、学類の専攻と専攻の分野の主題の図書が最も利用されていることが明らかになった。しかし、学年別にみると、学類の専攻の分野の主題の図書を最も借りているのは、3年次に最も多く専攻の分野の主題の図書を利用していることが明らかになった。さらに、3年次編入生の2年間の貸出状況については、学類によって大きく差があり、特に社会工学類では、2年間の学生一人当たりの図書の貸出回数が1.7と圧倒的に低い値となった。

このように、3年次編入生において学類毎に図書館の利用に大きく差が生じていることが明らかになった。より利用者のニーズを満たすためには、他大学出身者や高等専門学校出身者などのへの対応を検討することが重要であると考えられる。しかし、本研究ではデータの欠損もあり、3年次編入生について1学年についてのみの調査となり比較することができなかった。そのため、継続研究を行い、附属図書館内の複数年の貸出履歴データを比較することで、より利用者のニーズを満たす図書館運営が可能になると考えられる。

(指導教員 逸村裕)